奈良県立大学「研究季報」第13巻　第3号（2002年12月10日）

ツーリズム、創造性、オーセンティシティ*1

エドワード・M・ブルーナー
遠　藤　英　樹（訳）

本稿では(1)象徴人類学の知見に基礎を置きつつ（Bruner 1984; Turner and Bruner 1986）、ツーリズムとオーセンティシティの問題に注目し、その創造的プロセスについて概略する(2)。

創造的な人格が自らを変容させ超越する能力を有し、文化を変え得るといった考え方は微妙である。確かに常にカリスマ的預言者、政治的指導者、知的巨人たちは人々や国家を動かし、歴史における学問の方向性を変革してきた。例えばニュートン、アインシュタイン、アレクサンダー大王、ナポレオン、キリスト、マホメット、ジョイス、プルースト等がそうである。そういった例外的な個人でさえ、文化に関する超有機体論においては一つの位置を占めるに過ぎない。しかしポストモダンの象徴人類学によって展開されている理論では大抵、日常の名もなき人々でさえ彼らの暮らしの中で、自らの〈生〉を形づくるのだ。権力を持った人格やエリートたちによって着手される変革は多分、社会の大部分に受け容れられるであろうが、しかし変革はあらゆる社会階層において生じる。変容や超越は文化的パフォーマンス、すなわち経験の伝達とヴィクター・ターナー（Victor Turner）が考えたものに特に見受けられるのである。というのはパフォーマンスにおいて、社会は最も明白かつ力強く、文化的シンボル、パラダイム、ナラティブを表現し得るからだ。このように考えるなら以下のように言えよう。

もし文化が重苦しく、静態的であるなら、
もし文化がゆっくりとしか変化してくれないものであるなら、
もし新しいものが全くないのなら、
もし文化が重荷となるもので、抑圧的でさえあるなら、
ならば
一人の巨人が少しだけ、世界を動かすことになる。
しかし
もし文化が常に生成し続けるもので、日常の行為において不断に創られていると考えるなら、
もしアメリカのプラグマティストたち、すなわちハーバート・ブルーマー（Herbert Blumer）やディルタイ（Dilthey）に賛同し、意味は出来事に先行するのではなく、出来事とともに生じるという解釈学的伝統を支持するなら、
もしフランスのポスト構造主義に賛同し、「意味が表面的に現れているものの背後でテクストに埋没しており、出来事はそうした先行する意味をただ明るみに出すだけである」というわけではないと主張するするなら、さらに言えば、もし意味が制御できないもので、根本的に象徴的なものだと考えるなら、
もし文化が息づいており、常に変化し続けていると考えるなら、
もし文化的な表現が全て、たとえ僅かでも、これまでの表現と異なると主張するなら、
もし文化の様々な領域が相互に同じものではなく、むしろダイナミックな緊張関係があると考えるな

ら、

もし、あらゆる状況に通底する文化のコード、規則、規範など有り得ないと考え、その場ごとの即興こそが文化において避けられないものだと思うなら、

もし文化の伝達が過去からの重荷となる遺産を機械的に複製したり、再生したりするものではないと思うなら、

もし以上のことを受け容れ、経験、実践、パフォーマンスに関する人類学をすすめていこうとするなら、

ならば

文化を変えるのはナポレオンではなくても良いことになる。

名もなき人々も文化を変えうることになる。

もしそうなら、創造的な人格はもっと広い領域をカバーすることになる。世界を変えることはなくても、自己や文化を変容させることはできる。創造の表現は、いつでも、どこでも見出すことができる。

変化は社会生活につきものだといった主張には、何ら目新しいことが含まれていない。これまでにも、社会の静態論的な見方に対して多くの批判がなされてきた。しかしながら、我々はいくらか、天才的な人物やカリスマ的な預言者に言及することで変化を「説明」しようとしてきたのではないだろうか。あるいは、歴史的な力や不安定な時代、また北からやってきた侵入者といった特殊なコンテクストに変化の原因をもとめようとしてきたように思う。まるで人間には初期状態、コンピュータの用語を借りて言うならばデフォルトな設定があって、そこでは何も変化が生じておらず、あらゆる変化やイノベーションは初期状態から脱することで生じるというようだ。社会についてそうしたイメージを抱くのは、フカフカの安楽椅子に座りながら考えているからで、このような素朴な状態を離れて考えることが苦になると、あらゆる変化が説明を要する特殊な出来事になってしまうのである。

こうした観点からすれば、あらゆる創造的な行為は尋常でない人物、時代、出来事に帰せられることになる。ヴィクター・ターナー（Victor Turner）はプロセスやリフレクシビティに焦点を当て人類学に比類なき貢献を行なったのであるが、彼でさえ、いくつかの著作（1969、1974）においてリミナルなものに特権を与え、創造性が「尋常でない」事柄に追いやられてしまうことがあり、それによって日常的なものが消滅してしまっていた。皮肉ではあるが、彼はフォルマリズムと構造主義に対して生涯批判し続けながら、例外的なもの－社会劇－、どちらつかずの状態、マージナルなものを強調し、結果としてラドクリフ＝ブラウン（Radcliffe-Brown）に向かって日常的な社会生活を拒絶してしまったのである。社会は法の規則と構造的な原理に支配される退屈な場所となり、そこから人は一時的にエキサイトで創造的な事柄、変化に向かうのだ。だが結局は、その後に単調な実存に戻っていくことになる。もちろんターナー(Turner)はこうした批判によく気づいており、後の著作では強調点が変わっている。

数多くのエスノグラフィックな説明において、変化は尋常でない状況、特にいくつかの文化間の相互作用、人々の接触、革命の時代、さらには白人・宣教師・商人・移民・資本家・ツーリストの到来に帰せられてきた。だがどのような状態においても、人々は他の部族や、宗教家、商人、移民、よそ者と接してきたのである。創造性とは、文化が澱まない場合には必ず見うけられる特殊でまれな出来事なのではない。未開の社会でさえ、必ずしも変化は緩やかであるとは限らない。確かに変化が急速である時代もあるが、それ以外にはイノベーションがなく静止しているというわけではないのだ。

文化人類学者は、イノベーション、創造性、変化を描写するやり方について心を砕いてきた。その目的

は2つのものを対立するものとして見るよりも、プロセスを構造の一部だと見ることにある（Wagner 1975; Giddens 1979)。すなわち一方が他方に外的な力として影響を及ぼすと見るよりも、コンテクストをテクストの一部と見ることにあるのだ。こうしことを行なう上で困難となるのは、我々が西洋形而上学の考え方から逃れがたいということである。西洋形而上学はオリジナル、純粋な伝統といったものがかつて存在し、全てのものが現在までそこから派生しているのだと考え、オリジナル、純粋な伝統に特権を与えている（Derrida 1974)。このことをクリフォード（Clifford 1986）は神話的アレゴリーと呼んでいる。そこには起源の探求、消滅してしまったものとして未開をとらえる考え方が含まれている。これは、私がオーセンティシティの問題と呼ぶものである。

そうした神話は多くの人々に批判されてきた（Fabian 1983)。しかし、エスノグラフィーがこのように変容し始めた時、皮肉にも世界的な規模でマスツーリズムが展開されるようになったのである。エスノグラファーたちがエキゾティックでオーセンティックなものを追求するのをやめた時に、多くのツーリストたちが世界中に現れ、オーセンティックなものを要求するようになり、それを手に入れるようになったのだ。文化的パフォーマンスは、ツーリストの期待に応えるべく構築されるようになった。エスノグラファーが厚い記述を求めるのに対してツーリストは薄い記述を求め、エスノグラファーが歴史的世界を追求するのに対してツーリストは時間を超越したエスノグラフィックな現在性を追求する。エスノグラファーが複雑性を要求するのに対して、ツーリストは容易に手に入ることを要求するのだ。

私はバーバラ・キルシェンブラット＝ギンブレット（Barbara Kirshenblatt-Gimblett）と共にツーリズムについて研究したことがあるが、もし、そこで学んだことを一つ挙げるとするならば、それは、ツーリストがオーセンティックな未開を追求する力を見くびってはならないということである。ツーリストは、田園風で未開の、子どものように穢れていない、純粋でオリジナルなものを通して、「経験」を、そして自己の「起源」を探求する。彼らは楽園に戻っていこうとしているのだ。これまで旅行記と言えば(Pratt 1985)、西洋人が未開の世界に触れるというものであったが、今日、豊かとなった西洋人はツアーを組織し、自分から世界を探求しようとする。今やツーリストたちは、どの程度オーセンティシティを望むのかを自分で決めることもできる。ラヴィー（Lavie 1989）はシナイ半島にあるベドウィンの観光村について論じていたが、もっと時間がなくて体が弱いツーリストなら、エルサレムのすぐ外にあるベドウィンのキャンプを模造した場所で50分間だけ説明を聞いて終わることもできるのである。ツーリストは、自分がどの程度ベドウィンらしさを満喫したいのかを知っているのだ。

ある意味で、ツーリストとエスノグラファーは競合関係にある（Crick 1985)。どちらも外国に行き、自分の経験したことを綴るのだ。エスノグラファーは主に文字を綴るが、ツーリストは映像や物、すなわち写真や土産物で自己の経験を綴ろうとする。文書、写真、物はすべて同様に「表象」であるが、そこには大きな違いがある。エスノグラフィックな経験が言語（時に映像も含んでいる）を通して主に文字によって記録されるのに対し、ツーリストの経験は主に非言語的で視覚的なもので、映像や物によって表現される（Fernandez 1986)。我々はインドネシア、ケニア、エジプトといった第三世界を訪れるが、そこで観察したところでは、ツーリストが意味ある会話をするのは他のツーリスト、ツアーガイド、旅行会社の現地人スタッフといった人々とだけである。彼らが未開の人びとと関係を持つのは、彼らを見ること、彼らを写真におさめること、売られているスライドや絵葉書と同様に土産物を購入することによってであり、記念品としての土産物はツーリストの経験をそこに凝縮して閉じ込めてくれるのだ。

経済的な問題は別にして、我々が関心のある問題に的を絞って言うなら、これまであまり言及されてこなかった道徳的な次元がある。バリやマサイやベドウィンの人たちは彼ら自身の記号に変容させられてしまうのである。確かに彼らは文化的に特別な存在であるが、しかしながら、そこで彼らは自らが売ってい

る土産物と同じ単なる「もの」になってしまっている。ツーリストの観点からすれば現地の人びとはアフリカらしさや未開らしさを表現しているが、現地の人の観点からすればパフォーマンスには文化的な意味がある。この問題について、文化人類学者はどのような道徳的立場を持つべきなのだろうか。

オーセンティシティは次第にプロブレマティークな事柄になりつつある。エスノグラファーはオーセンティシティの追求をやめ、エスノグラフィックなプロセスを考察しようとしている(Clifford and Marcus 1986)。しかしながらツーリストは激しいほどにオーセンティシティを尚も追い求めようとしているのだ。我々が研究した民族は、今や自分自身のオーセンティシティを疑問視している。この導師は本物か偽物か。インドの導師は真の導師とペテン師とをいかに区別できるかを教えてくれるばかりか、インドに対する西洋人の憧れも馬鹿にしている。ベドウィンでは文化的なオーセンティシティを自分でも疑問視するばかりか、訪問客やツーリストが押し寄せることで彼らが伝統とするホスピタリティをどうやって維持していけばよいのかを悩んでおり、自分が本当のベドウィンなのかと考えるようになっている。ポストモダンという奇妙な時代に象徴的ではあるが、文化人類学者スマンダー・ラヴィー（Smandar Lavie）はイエメン人とリトアニア人のハーフ、そしてアラブのユダヤ教徒であり、バークレー大学で学んだイスラエル人であるが、自分の中にベドウィンの伝統が「息づいている」と確信しているのだ。

エスノグラファー、ツーリスト、現地の人びとにとって、問題は、ある事柄が本来的にオーセンティシティを有するのか否かということではない。そうではなく、いかにオーセンティシティが構築されているかということが問題なのだ。エスノグラフィー、観光のパフォーマンス、その他、文化的実践の様々な事柄がどのようなプロセスをたどって、オーセンティックなアウラを身にまとうようになるのか。オーセンティシティを創りだすプロセスとはどのようなものか。エスニシティが創られるのと同様に（Fischer 1986)、オーセンティシティもまた探求され再発明されるものなのだ。

これまでの議論を要約すると、文化における予測不可能性、流動性、曖昧さ、不確定性こそ創造性が生じる「社会空間」を提供するのである。人びとは人生を歩み、その中で予測できない出来事が起こるたび、それに合わせて文化を構築する。もちろん規則やコードが重要であることは否定しない。だが自由な即興や創造性を生みだす能力が人間には備わっており、そのことに目を向けてはじめて文化がいかに作用し変容するのかも理解できるのではないだろうか。文化とは何かを問うのではなく、文化がいかに達成され創られるのかを考えていくべきだろう。世界に意味を与え自己の人生の状況を解釈しようとする中で、人びとは文化を構築する。パフォーマンスや儀礼には革命的な力があり、変化はつねに訪れるのである。

［注］

(1) 本稿は、1987年シンボリック・インタラクション研究学会で発表された原稿をもとにしている。本稿をより詳しく展開したものは、『創造性－自己と社会－(Creativity: Self and Society)』(Lavie, Narayan, and Rosaldo 1989）の終章に収録されている。

(2) 私は文化人類学者であるが、社会学におけるシンボリック・インタラクショニズムに非常にシンパシーを感じている。1950年代私はシカゴ大学の大学院生だったが、その時にハーバート・ブルーマー（Herbert Blumer）の講義を受講した。また文化人類学を専攻する大学院生になったばかりの頃、ジョージ・ハーバート・ミード（George Herbert Mead）の文献を講読することが課せられていたことを思い出す。そのため私は研究者としてキャリアを積むようになり始めた頃から解釈的行為を重視し、文化人類学やその他の社会科学が1960年代に「解釈的転回」を迎えた時には、既にそれらを吸収できる素地は整っていたのである。

[参考文献]

Bruner, E. M., ed, 1984. *Text, Play, and Story: The Construction and Reconstruction of Self and Society.* Proceedings of the American Ethnological Society. Washington, DC: American Ethnological Society.

Clifford, J. 1986. "On Ethnographic Allegory ." pp.98-121 in *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography,* edited by J. Clifford and G. E. Marcus. Berkeley: University of California Press.

Clifford, J., and G. E. Marcus 1986. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography.* Berkeley: University of California Press.

Crick,M.1985. " 'Tracing' the Anthropological Self: Ouizzical Reflections on Field Work, Touris m,and the Ludic." *Social Analysis* 17:71-92.

Derrida, J. 1974. *Of Grammatology.* Baltimore, MD:Johns Hopkins University Press.

Fabian,.1983. *Time and the Other: How Anthropology Makes Its Object,* New York: Columbia University Press.

Fernandez,J.W.1986. "The Argument of Images and the Experience of Returning to the Whole." Pp.159-187in *The Anthropology of Exoerience,* edited by V. W. Turner and E. M. Bruner. Ubana: Univerisity of Illinois Press.

Fischer, M. M. J. 1986. "Ethnicity and the Post-Modern Arts of Memory." In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography,* editedd by J. Clifford and G. E. Marcus. Berkeley: University of California Press.

Giddens, A. 1979. *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis.* Berkely: University of California Press.

Lavie, S. 1989. "The One Who Writes Us: Allegory of Experience and Paradoxes of Occupation Among the Mzeina Bedouin." In *Creativity: Self and Society,* edited by S. Lavie, K. Narayan, and R. Rosaldo. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Pratt, M.L.1985. "Scratches of the Face of the Country;Or, What Mr. Barrow Saw in the Land of the Bushmen." Critical Inquiry 12:119-143.

Shostak, M.1989. "The Creative Individual in the World of the !Kung San" In *Creativity: Self and Society,* edited by S. Lavie, K. Narayan, and R. Rosaldo. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Turner, V, 1969. *The Ritual Process.* Chicago: Aldine.

_____. 1974. *Dramas,Fields, and Metaphors.* Ithaca, NY: Cornell University Press.

Turner, V., and E. M. Bruner, eds. 1986. *The Anthropology of Experience.* Urbana: University of Illinois Press.

Wagner, R. 1975. *The Invention of Culture.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

[訳注]

*1.本稿は、Bruner, E.M., 1989, "Tourism, Creativity, and Authenticity," Studies in Symbolic Interaction, 10: 109-114.の全訳である。

彼の簡単な紹介については、既に訳出したエドワード・M・ブルーナー「オーセンティックな複製としてのアブラハム・リンカーン－ポストモダニズム批判－」("Abraham Lincoln as Authentic Reproduction: A Critic of Postmodernism," American Anthropologist, 96(2): 397-415.)『奈良県立大学研究季報』第12巻第2号を見て頂きたい。ただブルーナー自らが注2の箇所で述べている通り、彼が社会学における「シンボリック・インタラクショニズム」にシンパシーを持ち、社会学とも非常に距離感の近い研究を行なっていることは強調しておいてもよいだろう。訳者自身、社会学研究者として「シンボリック・インタラクショニズム」を意識した研究を現在も積み重ねつつあるが、「シンボリック・インタラクショニズム」では人びとが創りだす「意味」や「プロセス」を重要視する。こうした側面から観光のオーセンティシティの問題にアプローチすることは、観光という社会現象に対する非常に有効な分析視角になり得ると訳者は考えている。